

データが語る “いま”

本川 裕



第①回

ケアの時代の深化

私たちが暮らす社会を統計データからトピックス的に読み解いていこうというこのコラム。連載を始めるにあたって、まず職業の“いま”を探ってみよう。

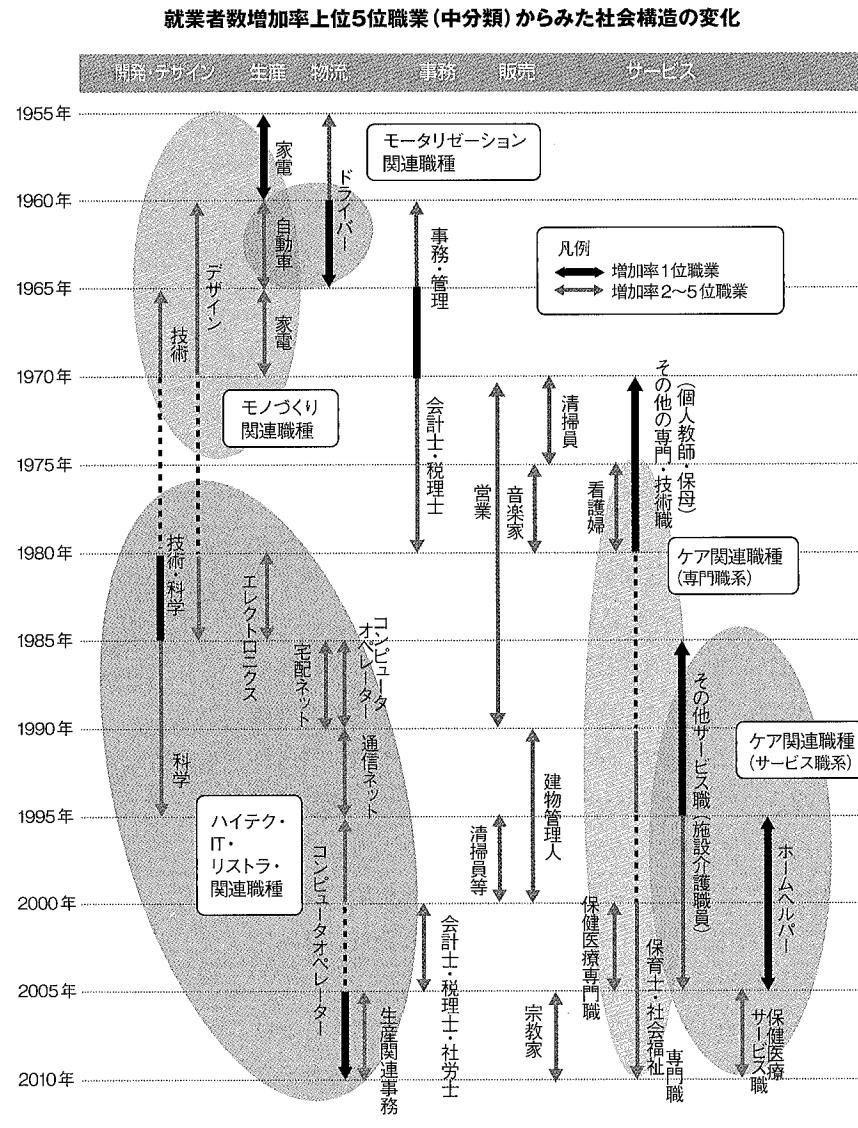
時代ごとにどんな職業に携わる人が大きく増加しているかを調べるとその時代の特徴が浮かび上がる。国勢調査(総務省統計局)の増加率の高い5位までの職業中分類を5年ごとにリストアップした。

1970年までの高度経済成長期にはモノづくり職種やモータリゼーション職種、それ以降は、ハイテク職種とケア関連職種とが並行して社会の求める中心職業となってきたことが分かる。

ケア関連職種は、当初は看護婦、保母といった専門職系を中心だったが、1985~2005年にはサービス職系、すなわち施設介護(最初の10年)と在宅介護(次の10年)の関連職種が最大増加率を示していた。

最近(2005~10年)の特徴を大胆にまとめると、以下の3点に要約できるだろう。

第1に、ハイテク職種はかつてのような研究開発関連の職種というよりコンピュータ・オペレーターなど職場の合理化やリストラを補うような職種に重点シフト。第2に、ケア関連職種は、サービス職系から保健医療や社会福祉などの専門職系が再度前面に立ち、福



(注) 職業中分類ベースの就業者数増加率でリストアップした結果である
(資料) 国勢調査(2010年は抽出速報集計による)

祉についても量的拡大から質的充実が重要となりつつある。第3に、宗教家が上位5位以内に初めて登場したが、これはフィジカルなケアから心のケアに重点がシフトしつつある現象の一部と見られるのではないだろうか。

このようにケア関連職種がサービス職系から専門職系に重点シフトしつつ

あるということは、女性の働き方においても、いわゆるM字カーブの中年層における就業率上昇がパートなど非正規社員の増加に結びついてきたこれまでのパターンから、M字カーブの解消と生涯を通じたキャリアプランをもつ働き方への転換の動きを示しているといえるだろう。



ほんかわ・ゆたか

東京大学農学部農業経済学科出身。(財)国民経済研究協会常務理事を経て、アルファ社会科学(株)主席研究員。現在、幅広い分野の統計データをグラフ化して公開する「社会実情データ図録」サイトを主宰しながら、地域調査等に從事。著作は『統計データはおもしろい!』、『統計データはためになる!』(技術評論社)など。